

自己教育への出発

特集

渡辺洋子

否定すべきことは、頭の中のコトバとして「教育」を考えること。できあがった考えを誰かから借りてくること。私は高校生、逆立ちしたって後ろを向いてたって生徒であるのだ。ということ、忘れちゃいけない。

「教育」というコトバはまだ私の単語帳には載っていない。けれど、自分が変えられたとか変わっていったという実感は、自分のものとしてどうしようもなくあるのだ。誰かが何かが確実に作用して。その誰か何かに対するおもしろいがある。良くなったかならないかなってカチの問題で、たいてい他人が決めること。自分というものはギリギリ抱きしめたい程いとおもしろいものだから、本当はそんなカチ判断なんてどうでもよいのだ。変えられた、変わっていったという自分への無理やりの感じ。それから生れる他へのおもしろい。「教育」

の結果と呼ぶのならそれでもよいけれど、何となくこれはやっぱり教師のコトバだ。(教師ってコトバも難しい。教師と先生と教員とそれから教育労働者と、みんな違うのだけれど、今はひとくくりに「教師」と呼びます)私の感じはやっぱりはみ出してしまふ。生徒である私にとつて、この感じこそ生きることもそのものなのだ。格好の悪い無自覚な部分をも包含した生活の感じ。私は「教育」というコトバを拒否しよう。

私は高校生。気がついた時には学校の中で呼吸していた、そういう誰にでも共通の事実を確かめてみる。私の生活は学校という枠の内でも動いている。毎日学校へ行くことによつて私の生活は成り立っている。私はその中で育てられたのだ。学校(現教育体制と呼ぶ人もいる)を良い悪いとかツブセツとか、いろいろだけれど、まず自分がその中に居るのだという事実を省略しちゃいけない。自分にこだわるのなら、すべてを引き受けなければ。

学校で、「教育」の名のもとに受けた数々の恨み辛み恥しきは、うれしさおもしろさ楽しさなんかを差し引いたつてたつぷり余るのだ。きれいに取りすますのでなく、両方とも、ガツチりつかんで離さないこと。学校を背負

って歩き続けること。もしも恨みを晴らしたいなら。学校は出口と入口のあるひとつのトンネル。春になったら決められたとおりに出てゆく私だけれど、私の背中で、高校は中学は小学校は、それ以前の事実が失くならないように決して失くならない。

今ここで私が生きていて、成長したいとおもっていることは確かなのだ。ここにある私の感じは、決して与えられたものではない。盗んだのだ。盗んで盗んで、より多くからより多くを盗み取ることで自分を肥やししていくこと。バリバリと音のする程に肥えることで、学校の殻を捨てること。学校という殻を捨ててから、自分の背中に学校という事実を背負い続け、自分の背中で自分の学校をつくり直さなければならぬ。恨みを晴らすというのは、自分で立っていく道を見つかることではない。そしてこれがその地点への、私の過程である。

学校を通り過ぎた後に、独りでどこまで遠くへ行きつづけるか?決められたとおりに大学へ行こうとしている私だけれど、今、「自己教育」というコトバを考え始めている。

渡辺洋子氏は高校三年生。キアツへ行つた下山弘至君の後を引き継いでミニコミ誌「孤立」を発行。

社会教育の現場から

福岡 博

こんにちほど、「教育」に内在する問題が私たちの日常生活とのかかわりのなかで重くのしかかっている時代はないように思う。敗戦後、我が国がおこなってきた「教育」の歴史をたどってみると、いかに官制の権力が強く支配してきたかが明らかであり、もはや、文部省を頂点とする現行の教育体制のゆきづまりを感じざるを得ない状況である。

社会教育（私はこの言葉を使うのにひどく抵抗を感じるのだが）の現場にみると、たえずその住民生活と密着した位置で仕事をすすめるにはいけないから、住民の反応を適確に把握して対象の欲求を満たすための配慮をしなければならぬ。社会教育学、学校教育とちがつて、自分なりの生活の場をもち、その生活を基盤にした論理をもっている人たちが対象となるので、「教える」「教わる」という両極の関係は、現在のように情報が大量に送りこまれ、しかも複雑に発展している社会のもとでは成立すること自体、無意味で

あるし、もし、成立するとすればひどく危険（あるいは誤った）な発想が根底に存在しているのしか思えない。私たちの多くの先輩がそうだったように、「教育」というたった二字のトリックで歴史に幾多の汚点を刻みこまれてきたことを思いおこさなければなるまい。

私は、ものごころつくまで「教育」とは何びともおかすことのできないもの、という考えが強かった。しかし、よく考えてみると、現在の教育が、人間が求めてやまない理想や創造、私たちの生活の実態や国がめざしている方向を適確にうけとめ考え、実践し得るだけの素材を「教育」の場に提起し、その機能を充分、果たしているか、どうか疑問である。いまや、教育は完全に資本の論理に追従することを強要されるに至っている。つまり、自己の主張や実践を権力の厚い壁に閉ざさせ、人間に人間であることの意味を忘却させ、物質万能の矛盾だらけの社会をつくりだした（元凶）は、生活の場から目をうばい、資本に奉仕する

ことを教えた「教育」の体質であるといわざるをえない。私は常に、生きた教育は「生産現場を原点とした論理の展開」がなければ確立できないと考えている。ところが、社会教育の現場に送りこまれる指導者の多くは、学校教育から数ヶ月間の研修で社会教育主事というライセンスをとり、私は社会教育主事でござる、という具合に肩書きを桶に、さも、もつともらしい理屈を武器にして、現実の住民生活に根をはって、社会をきびしくみつめ、政治を監視することを説き、住民のことばで一語に語り、考え、行動しようとしぬ。いよいよ仕事にもなれて、実感として住民生活を肌で感じるところには、再び、学校の管理職か指導主事にならなければならない。つまり、社会教育という仕事は腰かけにしかすぎない。

もつとも、社会教育制度自体、我が国では中途半端な位置づけしかされていないのが実情である。だが、昭和二十四年以来、社会教育が公教育として歩んできた二十数年の歴史はまさに権力が住民を「教えこむ式」以外の何ものでもなかった。むしろ、ことばを強くしていえば、住民が主権者であることの意味を、「教育」の場であいまいにしてきたといえる。

たとえば、私がやっている仕事の領域に、家庭教育学級という学習集団がある。主として子どもをもつ母親が対象だが、ここでは、「子どもの成長、発達段階に応じて、いかに健やかに育てるか」が学習の目標として設定され、学習目標へ到達するためのカリキュラムがつくられる。しかし、学習に参加して行く婦人の多くは、加速度的に変ぼうしてゆく農村社会のなかで数々の問題をかかえながら、出口を失なったカエルのように出るすべをみいだせないまま状況にあとからついてゆくのが精いっぱいというのが現実である。

高度経済成長政策の谷間で農村は、まるで綿が水を吸いこむようにして大量消費時代をむかえ、村にいる働きざかりの男たちのほとんどを「出稼ぎ」というかたちでかり出され、若い人たちの大都市への流出はあとをたたない。加えて、政治の無能さを農民の前に露呈したともいえる（米）の増産政策から一挙に減反、生産調整への移行……とこれらを背景に形づくられる幾多の問題を、みな、（家庭の責任）として転換し、「明るい家庭からこそ健やかな子どもがそだつ」として学習展開がなされているのが一般的な傾向のようである。だが、出稼ぎで父親が長期にわたって家庭

を留守にし、婦人がそのあいだ家庭管理の一切をまかされ、肉体と精神の疲労を蓄積しながらセックスのフラストレーションのしわ寄せを子どもにあたえるという状況からは、はじめながら、明るい家庭づくりなどできるはずがないのである。最近では、農村への工場進出で田畑の作業を朝、夕にすまず、安い賃金で外へ出て働く婦人がふえてきた。その結果、婦人の健康がいちじるしく粗末にされているという例や、家事の時間を制約されるために食生活が悪くなって、学校で貧血で倒れる子どもも出ているという話を聞く。また、婦人が外で働くことによって財布の中が満たされるかわり、子どもがねだるものは何でも買ってやったり、すぐお金を与えてしまうので、親と子どもの温かな心の交流がなされないまま、心の中を風が吹いているという寒むざむとした現象も起こっている。これら、どれひとつあげても、子どもの性格形成やしつけに大きく影響することはかりである。

学習から実践への手だてが、社会教育の場ではなかなかうまくない。いつも、その場かぎりの学習方法論の域を脱しきっていないから、実際に生活の奥底まで浸透し、社会の変革に役立っていない。社会教育に参加

することにによって実生活が変化してこないから、せんと学習への意欲もうすれ、参加してくる人が減ってくる。減ってくるから、どうしたら多く人を集められるかということになる。だから、いつまでたっても、生活課題解決の本質にふれる学習や実践活動に発展しないで終わってしまった。

私は、ある意味で社会教育は「住民活動」（または運動）の拠点にならなければいけないと思っている。つまり、教科書は与えられるものでなく、私たちの生活、そのものが教科書でもあるからだ。どこかが欠けている教育によってつくられた知識や常識を、一度こわしてしまつて、もう一度、再生させる作業が、いまこそ必要な気がしてならない。

私は、社会教育の現場にいて、あえて、批判する立場を持続しつづけたいとねがっている。

福岡博（29才）氏は、秋田県在住のサークル「村」の編集者。久保菜の「火山灰地」に魅せられ生き方を変えたと語る。

教育維新による世界連邦

市川英作

現在のような偏知教育をこのま、継続するならば、二十一世紀をまつまでもなく、人類の絶滅は必至である。現代は人類史上特筆すべき科学文化の興隆期であつて、それは科学に国境がないように世界を一体化したのであるが、その反面に恐るべき兇器と公害とが全人類の運命を、緩急いずれにもせよ絶望の淵に陥ししている。人類のこの危機を救うものは果たしてなんであらうか。

ユネスコ憲章前文には「人の心の中に平和のととりでを築かねばならない」と記され、トインビー博士も「この際人類の精神革命が絶対必要であり、その精神革命は自己中心性を克服することである」と力説している。

そのいずれもが心の問題である以上、それはまた当然に教育の根本的課題でなければならぬ。思えば、現在の教育は徒らに物質文化に追随して、個人に対する知識の詰め込みを主とし、生活を指導し社会の弊風を改めようとする努力を欠いていたため、物質主義、

利己主義、形式主義の風潮は世にみなぎり、青少年はそれを世の常態と考へ、わずかにその中に小市民的幸福を求めて日々を過しているものが大多数である。今日この危機を招来したものは、あるいは歴史の必然であるとしても、このま、に放置することは教育者として決して許されないことである。ここに教育者というのは単に学校関係者だけでなく、先輩として後進を導く立場にあるものはみな教育の当事者として真実の教育に心がけなければならぬ。元来、教育は原始以来、親子へ、経験者から未経験者へと、その生活経験を教え伝えたことから始まりその累積が知識となり、学問となり、文化ともなったのである」

「実に人類をして人類たらしめたものは教育である」とカントも言っている。今こそ教育は、その始源に立ち還らなければならない。知識は必ず実践されるべきである。知行合一、言行一致の世風の下にこそ、あらゆる人間関係に相互の信頼は深まり、協調融和、話

し合いの中に円滑に問題を解決することができるのである。教育はまた住みよい社会をつくるものでなければならぬ。ことに現在のような激動する世界情勢の下においては、その一体的な連帯性への理解を深め、世界市民意識を育成してこそ、自己中心性を克服して誰れもが互いに奉仕の精神をもつてそれらの職業にいそむことができるであらう。

現在の青少年に対しては早く世界連邦の構想を理解させ、平和確立への信念を強めて、その将来への明るい希望を与え、そうした新時代を創ることに心からの生きがいを感じせしめなければならない。

すべての人が後進者にこのような教育を行ない、ともに同じ志に結ばれるとき、それは世界連邦の確固たる基盤となり、国家を超え民族を超えた権威ある普遍倫理の上に神をめざす無限の進化を続けるであらう。

このような教育の実現を世界教育維新とおう。教育維新による世界連邦の結成こそ、二十世紀の最後を飾る人類の歴史の一大偉業でなければならない。

市川英作氏は、現在八王子学園の理事長で「世界連邦」(会長、湯川スミ氏)の教育者会議の責任者。熱情家である。

アメリカの宗教共同体

フミコ・ビレフェルト

……共同体のアイディアは、アメリカの若者の間で繰り返しのべられ、また実際に現実化され、発展させられつつあります。アメリカでの一つの問題は、共同体をルールなしにどう規制していくかという、非常に矛盾した点にあるようです。御承知の様にアメリカでは自由は神聖で犯しがたいものとして扱われています。しかし、一たん多くの人が集まり、共同生活を始めるとなると、どうしてもそこに何かのルールが必要になり、何らかの形で個人の自由を束縛することにになります。もし、ルールがなければどうしようもない混乱となり、結局は共同体の存在そのものが不可能になってしまいます。当面の課題は、こうした混乱をさげ、しかも出来るだけ発展させてゆくというところにあるようです。

現在、ただひとつ非常に成功している共同体は、宗教的共同体ではないかと思えます。この西海岸には、数えきれない程の宗教共同体が存在しています。大きなものを

挙げれば、仏教、ヒンズー、スワイ、勿論キリスト教などで、これらのものがさらに小さなグループにわかれ、無数の若者達を引きつけています。私の夫も、もう7〜8年も前から禅のグループに加わっています。これは曹洞禅で、サンフランシスコに本部があり、禅センターと呼ばれています。ここには常時七〇〜八〇人の学生が住んでおり、センターの外に住んでいる者を加えれば三〇〇人程度の学生がいます。

またタサハラという所にゼン・マウンテン・センターというのがあり、四〇〜五〇人の生徒が修行をつんでいるわけです。私達もこの夏またタサハラに二週間程行って来ましたが、ここでは非常に厳しい日課が生徒に課されています。朝四時四十五分の起床から夜十時の就寝まですべてはスケジュールに従って行なわれます。ここでは、いわゆる一般の共同体の問題はあまりないようですが、そのかわり、いわゆる宗教的問題が存在するようです。この他に臨済禅のグループもあり、またチベットの仏教グループ、中国禅のグループ、とにかく東洋の宗教は非常な魅力をもって迎えられています。その原因は近代文明における精神の

備北共同体に向けて

尾関 弘

……備北は四月からの出発に、準備が進められています。正月にスタディ・キャンプをもって、①共同化の程度について、②内部運営について、③理念化について等が話される予定です。

(1)備北百人委員会宣言ができました。

Action Committee 方式で、一つの組織論

(結社論) 技術論として提出します。

(2)備北五原則(生活・生産・自立・創造・連合)も理念化して、徹底します。

(3)備北内の五つのフラクションの構成。と話が具体的になる程、面白くなってきました。どこまでやれるか判らないが、生きた証となるような事をした。モデルは大正行動隊です。目標は階級闘争と文化革命です。…… (大阪)

告知板

■日本協同体協会

▽共同体的研究会、共同性発見集団、ゲルコムなどの研究会、サークルについては、直接問合わせして下さい。

※東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイツ10号 電三七〇二二八一三

■関西読者会

▽毎月第四日曜日(変わることもあり)午後1時から、守口市市民会館(京阪守口駅下車5分)で定例会をもっています。ミニコミ「コミュニケーション」も発行しており、希望者は郵送料+カンパをそえて注文して下さい。

※尼崎市水堂榎木20 榎木荘 今井みさを

■名古屋読者会

▽毎月第三日曜日午後7時〜9時 F I W C 東海事務所(昭和区

円上町2-12 電八五二一四四六九)で。テーマは「私の共同体観」

※名古屋市守山区大字小幡太田88 小幡団地58-130-1 梶原和義 電七九三三三三三三

■仙台読者会

▽月一度ぐらいのペースで、キブツ、共同体などについて話し合っています。テーマは、しばらくの間「人民公社」です。

※仙台市堤通雨宮町4-3 金原昭子 電三四一六八七一 佐々木方

■府中読者会

▽別名「共同体研究会」。「土が欲しいもぐらの会」の研究会の延長としてやっています。毎月第二、第四土曜日の午後9時〜翌日昼ごろまで時間をとります。

※都下府中市四谷3-55-12 ぐるうぶ・もぐら 電〇四二二一六四一七二四

■富山読者会

▽現在、構想中。協力者の出現を待っています。

※富山市八ヶ山三八二二 山形みな子

■一燈園

▽智徳研修会 毎月七日〜十日におこない、実践研修を通して無所有奉仕の精神を学ぶ。会費は三千元と米一・五キロ。

※京都市東山区山科四の宮 光泉林 電五八一三三三三六

■山岸会

▽特別講習研鑽会(特講) 三重県の本部では毎月1日、15日北海道の別海町では毎月21日から、各一週間。費用は七千円。

※三重県阿山郡伊賀町春日 山岸会本部/東京都新宿区戸塚三一一三 ヤマガシズム案内所 電三六八四六五〇

▽ヤマギシズム大阪連絡所開設

※大阪府四条畷市南野六六九 松並憲三方 電〇七二〇一七六

■共同性発見研究会

▽毎月第一、第三日曜日午後一時より。

※神戸市灘区国玉通3-7-18 村松方

■心の科学会

▽土曜講座 毎週土曜日の午後1時〜4時、千代田区麹町1-7 久恒ビル内日本間

※東京中央郵便局私書箱一六〇八号 電〇四八二二五二四九八六(神田孝一)

■みみずの会

▽毎月第四土曜日の午後六時半から新宿区立赤城社会教育会館で、「労働と人間関係」について考え合う。

※電二五五二六八七一 東洋シユランク 北邦彦まで。

■ベ平連

▽定例デモ 2月5日3時より清水谷公園(予定) ※電〇三二二六七二四七一

協会日誌

11月3日 記念すべき引越しの日。明治神宮の森に近い静かな場所だ。環境が変わることによって、事務局のあり方、そこで働くばかりの心持ちも変わってくる。ここを拠点とするぼくらの活動や生活を、さらに生き生きとしたものに変えよう。

11月7日 この日から一週間東京以外の地方に住むキブツ研修希望者の面接をおこなう。みんなの話しを聞きながら、この社会の病根の深さを思わざるをえない。キブツへ行くのも大きな意義があるが、それ以上にそれぞれの場に踏みとどまって変革への努力を続けることも大切だと、しきりに考える。

11月10日 英文の共同体的通信 Commu-News from Japanの第一号ができた。世界中の仲間と交流してゆこう。

イスラエル・東欧・ソ連をまわって帰国した宮部一郎氏(本協会理事長)がきて、みやげ話しをしてくれる。

11月13日 ゲルコムの第二回会合。名古屋から三人かけつけ話しこむ。

月刊キブツ仙台読者会の金原昭子さんがきて、女性ばかりで毎回なごやかに会合を続けている様子を話してくれる。

11月14日 東京近辺のキブツ研修希望者の面接選考会を家の光会館で一日中おこなう。奥村久雄、牧野国男、竹内新子、長谷場悦子、石井直子などの各氏 hands 手伝ってくれる。

11月16日 月刊キブツ10・11合併号を発送。「特集・アメリカコミュニケーション群像」ユニークな号のつもりだが、いかが。

11月17日 衆院沖繩返還協定特別委員会が自民による強行採決。政治のゆがみがクッキリと浮かびあがる。

11月20日 共同性発見集団の会合。愛称「赤坂コミュニケーション」は変えねばなるまい。

11月21日 キブツ・ガルドンの若いメンバーのイツハック君が世界放浪旅行中に立ち寄る。旅行を通して、キブツの価値を再発見したという。

11月23日 共同性発見集団の仲間とともに、十月市民行動のデモに参加する。沖繩のさまざまな問題がアイマイにされたまま、またも沖繩が犠牲にたれようとしている。

ここ数日、この号の特集企画者の野本三吉が泊まりこみで仕事をすする。

11月27日〜29日 三重県春日の山岸会本部会場で「第四回共同体的話合いの会」が開かれ、一燈園、大倭紫陽花邑、山岸会(春日、豊里、神戸、大阪)、船南農園、厚木振出塾などからの参加者が集まる。こちらからは世話係として二人が参加。運動、

機構、経済、思想などにわたって、さまざま意見が出る。それぞれの集団の間に多様な関係が生まれつつあるのが肌で感じられる。

11月29日 山岸会の帰り、大倭紫陽花邑の空気を吸ってから大阪の自由連合のアジトを尋ね、徹夜で仕事をしている三人とつき合う。翌朝、釜ヶ崎の住人の山口君に街を案内してもらおう。

12月1日 12月号を発送。

12月2日 一燈園の二世の江谷慎一氏が東京の画廊で「やきもの展」の個展をおこなったので見に行く。がっしりした暖かみのある作風だ。

12月3日 昼食を再び一緒にして、皆で玄米とミソ汁を毎日食べることにする。

12月4日 インドとパキスタンが全面戦争に突入。関西大で内ゲバがあり、学生が二人死んだ。——この世界をはやく変えてゆきたい。

新しい農村指導者の雑誌

地上

B5判 ● 定価140円(通常月号)



激動の'70年代を乗り切るため 農協役職員、農業経営者は

全員読もう

正確な情報／正しい分析による

重点特集

● 3つの重点ポイント

農業・農政の問題点をつく

農協のあるべき姿を追求する

生産と販売戦略の方向をさぐる

お申し込みは農協へ

制作部メモ

▼今月号の執筆者の一人である大西伍一氏より『江渡狄嶺研究』という本が贈られてきた。よみ進むうちに、狄嶺氏の業績はいうまでもないが、その傍らに寄り添って生きたミキ夫人のしただかな存在があった事によい感動をおぼえた。日々の苦しい労働の中で家庭教育の重きは、大変なものだったろう。声高らかに叫ぶりの運動もよし……。だが、私にはミキ夫人の生きざまが示す静かな強靱さが、ずっしりとこたえる。恭子

どうも答えようがない。そこには他人の活躍を聞き、それを受け流す者のうしろめたさがある。しかしこの〈場〉は今ほ特に必要だ。誰か踏み止まり、ここよりあちらへ仲立ちせねばならない。ヒコ

▼共同体ということばを日々くりかえして語らねばならない環境のなかにいると、常々反省しているにもかかわらず〈共同体〉にしばられている自分を発見して、ああいやだと思ふ。固定化した思想を持つことは容易である。だが生が、この大地のうえに棲息するすべてのものと同様に、変化しつづけるものである以上、生きるために必要な個人の思想も又、この生の変化とともに動きつづけるものでなくてはならない。マサヒト

▼今回はじめての試みとして、制作部以外の者に特集企画の責

任をとってもらった。この雑誌の性格と企画者の個性とが裏りある出会いを実現することを願ったが、どうだったろうか。これからも、新たな関係を作り出すべく、こうした試みをやりたい。読者の方が自発的に企画を持ちこんでくれることも歓迎する。この雑誌を通じて、一つの目に見えない〈共同体〉を創ってゆきたいのだ。哲

写真について

本号に載っている写真の多くは、山岸会本部のご好意によって使わせていただいた山岸会の子供たちの写真です。子供たちの生き生きとした表情が、自然と集団の中のびのびと育っている子供たちの澄んだ魂の躍動を伝えてくれます。44頁の写真は新しい村の子供たちです。

■直接購読(入会)のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者(キブツ会会員)によって支えられています。あなたも入会してみませんか。1年間(12号)の会費は入会金とも2000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業などを書きそえて、直接こちらへ送って下さい。

■月刊キブツ取扱書店

東京—新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房 大阪—會根崎書店、ウニタ書店 京都—京都書院 札幌—富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台—八重州書房 盛岡—第一書房 福岡—九大生協 富山—清明堂

■印刷所—創土社 東京都港区芝5-16-13 電話 452-0501・6069

月刊キブツ 1972年1月(通巻94号)

頒価 150円 送料16円(1年間2000円)

東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイッ10号 日本協同体協会

電話 370-2813 振替・東京24403